

ニクソン訪中

石 井 修
一橋大学名誉教授

目 次

- I はじめに
- II 「チャイナ・イニシアティヴ」の始動
- III 「チャイナ・イニシアティヴ」の本格化
- IV “POLO I”
- V 「ニクソン・ショック」
- VI “POLO II”
- VII コミュニケ作成
- VIII 中国代表権問題との絡まり
- IX ニューヨークの裏チャンネル
- X ヘイグ訪中
- XI ニクソン訪中の準備
- XII ニクソン訪中
- XIII おわりに

I はじめに

中国がGDPで日本を抜き世界大第2位となったことが報じられた。2010年8月1日の米国からのニュースだった。それを遡ること40年、中国はプロレタリア文化大革命とソ連との対立のため、経済的、外交的孤立の只中にあった。この中国を今日言う「関与政策」(engagement policy)で国際社会に引き入れ、その責任ある一員にしようとしたのが、1969年1月20日正午に米国の第37代大統領に就任したニクソン(Richard M. Nixon)だった。

このとき米国はヴェトナム戦争の泥沼の中に喘いでおり、財と人命の甚大な

消耗を強いられていたうえに、国内外で批判と抗議に曝されていた。遅く見積もっても第2次世界大戦末期から世界の覇権国となった米国のその“覇権”が揺らいでいるかのようだった。国際経済面では敗戦から立ち直った日本や西独の猛追を受け、軍事面では、キューバ・ミサイル危機での屈辱を晴らそうとソ連はICBMの分野でついに米国とのパリティを確保したかのようだった。日本は1968年にGNPで西独を抜き資本主義圏で第2位に躍り出たところだった。

ニクソンにとっての喫緊の課題は東南アジアでの戦争を終結させることであったが、かれにはより長期的に「平和の構造」(the “Structure of Peace”)を創出したいとの願望があった。このためにも、そしてヴェトナム問題解決のためにも、20年余に亘っていた中国との対立を緩和させ、これを梃子として対ソ「デタント」を確立することが至上命題と感じられた。

ニクソンやかれの国家安全保障問題担当補佐官を務めたキッシンジャー(Henry A. Kissinger)について、またその政治哲学や戦略について書かれたものは夥しい数にのぼっている。本稿は、10年くらい前から公開され始めた「ニクソン大統領文書」(the Nixon Presidential Materials)を中心に、それを米国務省文書や二次資料で補いながら、ニクソン政権発足から1972年2月に中国を米国大統領としては初めて訪問し、首脳会談を実現するに至るまでの足取りを辿り、その意味について考察することを目的としている。従って、あくまで米国の側から見た歴史の再構築に留まっていることは自覚している。ただ、米戦略のなかに“日本”がどう位置付けられていたか、また米中交渉の過程で“日本カード”が相互で如何に利用されたか、に特別の注意が払われる。

II 「チャイナ・イニシアテイヴ」の始動

対中和解を探る可能性は早くも、ニクソンの政権移行チームがニューヨーク・

マンハッタンのホテル・ピエールでスタートしたときに、ニクソンとキッシンジャーとで話し合われたとされる。政権発足から12日目の2月1日にはニクソンからのサインのないメモが、ホワイトハウス内のキッシンジャーの机上に置かれた。ニクソン政権下で、国家安全保障会議 (the National Security Council = NSC) は以前と比べ格段に強化され、このNSCを取り仕切ったのがキッシンジャーだった。メモには「チャイナと和解する可能性を探れ」とあった。2月5日にはNSCは“National Security Study Memorandum (NSSM) 14”なる文書で、これまでの対中政策を再検討し、「別のアプローチ」を採った場合の「コストとリスク」の調査を各省庁の次官からなる次官級委員会 (the Under Secretaries Committee = USC、議長は、国務次官) に命じた。ニクソンはまたキッシンジャーに水面下で、政府高官や大物政治家、それに“チャイナ・ロビー (台湾ロビー)”の代名詞のようなジャッド (Walter H. Judd) 元下院議員に探りを入れるように命じ、自らもマンズフィールド (Mike Mansfield) 上院院内総務 (民主党) には中国を国際社会に取り込むときが来たと告げた。

キッシンジャーは欧州やソ連の専門家であり、アジアへの関心も知識も欠如していたこともあり、大統領のイニシアティブを“夢物語”と感じ、「可能性はゼロに近い」(fat chance) と大統領首席補佐官であるホルドマン (Harry Robbins “Bob” Haldeman) に漏らしている。先行研究はニクソンとキッシンジャーとの関係を「機関士」と「いやいやながらの乗客」, 「先導者」と「追従者」などに喩えている。なかには「プロフェッサー」と「ステューデント」と皮肉ったものまである。しかしキッシンジャーは中国がソ連に対する圧力として働くことには気付いており、次第に全力を挙げて取り組むようになる。

いくつかの研究は「地政学的政治家」ニクソンと「ロマンチスト」ニクソンの二面性を指摘している。事実、大統領のスピーチライターは回顧録の中で次のようにニクソンを描いた。

「ニクソンはチャイナへ行くことを夢見ていた。カリフォルニアで生まれ育っ

たかれは、太平洋を目の前にし、大西洋や欧州ではなく、アジアへ顔を向けていた」「チャイナはニクソンを魅了していた。その神秘性、不可解性、そしてかれにとって政治的・外交的地平を切り拓いてくれるかもしれない可能性ゆえにであった。」

ニクソン自身も回顧録の冒頭で次のように語っている。ヨーバリンダというロスアンジェルスの子供の片田舎の決して豊かとはいえない家庭に育った幼少期の回想である。

「そしてそこには子供の想像力を掻き立てるものが沢山あった。太平洋を西へ向って覗き見る…昼間は蒸気機関車の煙を見ることができた。夜にはときどき列車の汽笛で目を覚まされることがあった。そのあと、いつか訪れてみたい遠く離れたいくつもの場所を夢見るのだった。」

このロマンチストの側面，“チャイナへの憧憬”とも呼ぶべきものを認識しないと、ニクソンが中国に対して反共的言辞を弄しながら、他方で、ある論者の主張するように1954年にすでに対中政策転換を胸中に秘めていたことが説明できないのである。

8年間の副大統領時代のあとの政治的不遇の時代に、ニクソンはペプシコーラの顧問弁護士を務めながら、海外を旅行した。何度も来日し、岸信介＝佐藤榮作兄弟に温かく迎えられた。ライシャワー（Edwin O. Reischauer）米駐日大使は1964年3月に精神異常の少年に右腿を刺されたあと、輸血による肝炎で東京・虎の門病院の病床にいた。ニクソンは（ニクソンを嫌っていた）ライシャワーを見舞い、その後、大使執務室へ電話を入れ、米国は「チャイナ」の承認に踏み切ることが望ましいと力説した。このことがあったために、のちの進展にライシャワーは少しも驚かなかったと言う。

大統領選挙を翌年に控えた67年には選挙を視野に入れて4度も海外を旅した。このとき共産圏のルーマニアからは入国を認められたばかりか、街頭の市民からも歓迎された。チャウチェスク（Nicolae Ceausescu）共産党書記長と長時

間会談し、もし8億の人間を怒れる孤立状態に置いておくと、20年のうちに中国は世界平和に重大な脅威を与える、と持論を展開した。台湾では蒋介石（Chiang Kai-shek）総統に会ったが、蔣が依然「大陸反攻」政策にしがみついていることに啞然とした。

これらの旅行を踏まえ、かれのスピーチライター兼補佐官であるプライス（Raymond Price）の助力を得て、『フォーリン・アフェアーズ』誌に「ヴェトナム後のアジア」を発表し、チャウチェスクへ語った内容に加え、中国自身が変身する必要性を盛り込んだが、ニクソンが一市民の身であったこともあり、余り注目を集めなかった。

68年大統領選挙の最中、英人ジャーナリストがニクソン候補に対して、「中国」を封じ込めるためにソ連と結託することを望むかと問うた。それは米国の政策が人種偏見によるものとの印象をアジアに与えかねないので不賛成だ、とニクソンは答えた。同じ選挙戦中に「もしかれら〔北京政府〕がヴィザをくれるなら、北京へ旅するかもしれない」と側近に漏らしている。

「チャイナ・イニシアティヴ」で決定的な役割を果たすことになるのは、「パキスタン・チャネル」と「ルーマニア・チャネル」だった。69年夏のニクソンの海外旅行のなかにこの両国が含まれていたことは興味深い。7月20日に月面着陸に成功した「アポロ11号」は24日に太平洋上に着水。ニクソンは宇宙飛行士を讃えるべく23日に南太平洋へ飛んだ。「グアム・ドクトリン」が記者会見の形で発表されたのはこのときである。ニクソンによれば、この旅行はキッシンジャーが最初に試みた北ヴェトナム側との極秘の接触を「完全なカモフラージュ」するものともなった。

8月1日（ないし2日）にブカレストに到着。前年に「プラハの春」が踏みこまれたあとだっただけに、ニクソンは自分を歓迎して、街頭で踊る群衆の勇氣に特別な感動を覚えた。チャウチェスクには、「あと25年で中国は10億の人口を持つ。もしこの国が封じ込められた状態だと、世界を破壊するような

猛烈な爆発力となるだろう」「米国は旅行制限の緩和などの措置をとっている。貴殿が米国と中国の仲立ちをしてくれれば有難い」などと語った。

この1年後にニクソンは再び、チャウチェスクとパキスタンのヤヒア・カーン（Agha Mohammad Yahya Khan）大統領に会うことになった。10月24日は「国連デー」である。1970年は国連創設の25周年で、ニューヨーク市の本部には世界の元首クラスが参集した。このうち幾人かはワシントンに招かれ、ホワイトハウスでニクソンとの会談をもった。佐藤榮作総理も首脳会談を行い、緘黙問題解決の遅れを謝罪したりした。しかし、ニクソンにとっては、ヤヒアとチャウチェスクとの会談こそ重要だった。

25日のヤヒアとの会談。

ニクソン— 米国内にはインドに肩入れするものが多いが、われわれはパキスタンを大切に思う。

ヤヒア— パキスタンは米国が味方になってくれるまで四方敵に囲まれていた。それだけに米国との友好関係は大切にする。われわれは律義な国民だ。

ニクソン— 閣下は北京へ行かれると理解している。米国が中国と交渉を始めることは最重要である。（そして、次の2点を強調した。）

- (1) 米国は他の国と組んで中国と敵対することはない。
- (2) 米国は秘密で話し合うために大物使節を送る用意がある。

ヤヒア— 閣下の考え方を中国側に伝える。

ニクソンはチャウチェスクのために晩餐会を催した際、これまでのように“Red China”“Communist China”ではなく“People's Republic of China”と初めて正式呼称を用いて、シグナルを送ったことは有名である。

26日のチャウチェスクとの会談。

ニクソン— 前回〔1969年8月〕の会談で米国が中国と会談を始めたいとの意向を示し、これを北京へ伝えてくれたことを感謝する。われわれはワルシャワでの〔米中大使級〕会談がソ連に筒抜けなので、別のチャネルをほ

かの国の首都に開設したい。

チャウチェスクー 米中関係改善は国際社会に好ましい影響をもたらす。まず大事なことは中国の国連加盟だ。

ニクソンー 国連代表権の問題は、ご承知のように、米国のこれまでの台湾との結び付きがあるので、とても難しい問題だ。

チャウチェスクー ルーマニアは中国とは特別に友好的な関係を保っている。…ルーマニアはこれまでにソ連に対して米中の良好な関係は望ましいと伝えてある。

ニクソンー 米国はソ連、中国の両方と友好的な関係になることを欲している。これら2つの国を互いに刃向かわせて操ろうとする気は毛頭ない。

III 「チャイナ・イニシアティヴ」の本格化

実際にヒラリー (Agha Hilaly) パキスタン駐米大使が“パキスタン・チャネル”を担ったが、ヤヒア大統領自身が決定的な役割を果たした。“ルーマニア・チャネル”では、ボグダン (Corneliu Bogdan) 駐米大使の仲介が重要だった。このほかにも“オランダ・チャネル”，“フランス・チャネル”，それに“ノルウェイ・チャネル”もあった。しかしながら、米国は「パキスタン・チャネルの方をわずかながら好んでいた。」なぜなら、対ソ関係でパキスタンの方がややこしくなかった。ルーマニアは逐一、ソ連に報告をせざるを得なかっただろう、とキッシンジャーは記している。

ワシントンのイニシアティヴに比べれば、北京の反応は鈍かった。文革は下火になっていたが、共産党指導部内は、対米路線で二分されており、全体的に懐疑的であった。イデオロギー的しこりが残っていた。最終的には毛沢東の決断があった。かれを動かしたのは言うまでもなくソ連からの脅威だった。68年夏のチェコスロヴァキアへの軍事介入とそれを正当化する「制限主権論」(ブ

レジネフ・ドクトリン)、さらに69年3月の2度にわたる、そして7月のソ連との軍事衝突だった。米国の偵察衛星は中国側の敗北を示していた。

米国内では、「百万人委員会」(the Committee for One Million Against the Admission of Communist China to the United Nations)などの“チャイナロビー”の勢力は衰えつつあった。とは言え、閣内にもアグニュー(Spiro T. Agnew)副大統領やコナリー(John B. Connally)財務長官は対中強硬派、ロジャース(William P. Rogers)国務長官は慎重派でかつ台湾に同情的だった。

米国側を勇気づけたのは、ヒラリー大使によって度々もたらされるヤヒア大統領からのメッセージだった。とくに70年12月9日のメモはヤヒアの11月の訪中後のもので、実質的に「周[恩来国務院総理]からニクソンへの公式で個人的な回答」だった。このあと12月28日エドガー・スノウのこと、71年4月には「ピンポン外交」がある。

69年2月5日の“NSSM 14”のあとにも、NSCでは対中政策文書が次々と生み出されていた。6月26日には“National Security Decision Memorandum (NSDM) 17”(対中経済制限の緩和)、“NSSM 106”(対中政策)(11/19/70)、“NSDM 105”(米中間の旅行・貿易の増加への諸措置)(4/13/71)。この問題については、すでにNSCの下部機構である次官級委員会(The Undersecretaries Committee=USC)が検討し、肯定的、積極的な勧告をしたことをキッシンジャーがニクソンへ報告している(3/25/71)。

“NSDM 105”(4/13/71)にニクソン大統領が署名した翌日、大統領名でプレスリリースが出され、査証、ドル持出し制限、米系石油企業の活動、中国向け貨物、中国への(香港や第3国を経ない)直接の輸出(ただし非戦略物資に限る)——などの緩和を国民に伝えた。

1971年6月10日のプレスリリースでは輸出規制を緩和された膨大な数の非戦略物資の具体名が列挙された。71年6月9日付の大統領支持への回答として、USCが「米中間の旅行・貿易増大への最初の第一歩の結果とさらにとる

べき措置についての勧告」なるメモランダム（1/13/72）を提出した。そのなかで最重要の問題として、高度技術を伴う品目の輸出許可について、中国にも、ソ連と同等の待遇を与えるべきなのか問うている。国務省と商務省は賛成、国防省は反対、と USC 内部で意見が分裂した。

冷戦のさなか、対共産圏に対しては NATO 諸国と日本とが「ココム」(CO-COM=the Coordinating Committee) を設置し、共産圏諸国に対して厳しい禁輸リストを作成・実施した。朝鮮戦争に中国が介入したあと、ココムを形成する国々には、別途、中国や北朝鮮などを対象に、ココム禁輸リストよりさらに厳しい「チンコム」(CHINCOM=the China Committee) リストを決定した。このチンコムとココムの禁輸品目リストの格差を「チャイナ・ディファレンシャルズ」と呼んだ。しかし対中貿易への関心の強かった英国や日本はこのディファレンシャルに不満を抱き、英国主導のもとチンコム遵守を停止した。つまり、チンコムはココム並みとなり、形骸化する。ところが“中国憎し”の感情の強い米国は、日英に倣わず、超然としてチンコムリスト遵守を続けていた。その米国が、いまやリストの緩和を始めたのである。

ニクソンは議会に宛てた第2回目の「外交政策報告」(Foreign Policy Report) (2/25/71) の中で、中国の正式呼称を使った。米国の公式文書では先例のないことだった。4月16日には新聞編集者協議会年次大会の質疑応答の中で、長女トリシア(Tricia (=Patricia)) が6月に結婚することに触れて、新婚旅行にも話が及び、どこに行かせたいかと問われた。ニクソンは少し考えたあと、そうだな、アジアが良いよ」「われわれの生きている間に。早ければ早いほどよいが、偉大な都市や人びとを見に中国へ行ければ良いな」と答えた。ピンポン外交を受けて行われた記者会見(4/29/71)でも、ニクソンは「大陸中国へ行きたい。いや、いつか何らかの資格で行くつもりだ」と語った。

IV “POLO I”

中国側からの回答にはいつも時間がかかり、焦らされるので、米国側もすぐに飛びついた印象を与えたくなかった。キッシンジャーからニクソンへのメモランダム（1/12/71）の片隅に「こちらが余り乗り気（too eager）に見られるかも知れないことは確実だ。冷まそう」と、ニクソンの手書きの書き込みが見られる。

4月27日にヒラリーからキッシンジャーへ、周がヤヒアに宛てたメッセージが届けられた。米大統領の特使を第3国ではなく、北京に迎えたい、との内容だった。特使としてキッシンジャーが自明のことだったわけではない。多くの人物の名が消去法で消されたあと、キッシンジャー自身の売り込みもあって、かれに落ち着いた。ニクソンのキッシンジャーに対する感情には複雑なものがあったことは誰しも証言しているところである。

中国への回答は“パキスタン・チャネル”を通して、5月10日に周に届くようにした。草稿は入念に練られ、第4稿のあと最終稿が完成した。「キッシンジャー博士を特使として歓迎する」との待ちに待った回答は6月2日にヒラリーによりもたらされた。ニクソンはキッシンジャーとブランデーで祝杯をあげた。大統領とキッシンジャーとが密談を交わすときには、ホワイトハウス内のリンカン・シッティング・ルームが夜遅く使われていたが、この祝杯も同じ部屋においてであった。

キッシンジャーの極秘訪中は13世紀末到北京まで旅したヴェネツィア人の名に因んで“POLO”の暗号名で呼ばれることになった。出発10日前の6月21日に大統領にあてキッシンジャーはメモランダムを書き、A.「日本」、B.「ソ連」の2項目に関して、自分が中国側とどのように議論するか明らかにしていた。

A. 「日本」——

「美帝の扇動により、日本の軍国主義が復活している」との中国の絶えざるプロパガンダに反論の必要がある。…アジアのバランスとなっている米国がこの地域から出て行くことは、それこそ日本が急速に軍事化し、核保有をすることになる。日本が危険な方向に進まないことを望む点では米中の利害は一致している。

B. 「ソ連」——

米国は「米中交渉と平行して」ソ連とも交渉を進めようとしている。しかし、このことは中国の利益を損なうものではない。また「米ソが」中国を相手に共謀することはない

ニクソンはキッシンジャーのこうした考えも吸収しながら、キッシンジャーが出発する当日である7月1日の午前に2時間ほどもかけて、大統領執務室でキッシンジャーに対して対中交渉の作戦を指示した。主要なものだけを列挙する。

- 日本のこれから進む方向性が「中国にとっては」脅威となる可能性のあることを「向こうで」キッシンジャーが強調すること——これが重要だ。
- 米軍が撤退した場合の日本には、アジア諸国が不安に感じることを中国は認識すべし。
- 日本人が軍事力を復活させる気になれば、短期間にそうする能力、リソース、ノウハウを持っていることは明らか。
- 中国との交渉の際、台湾を売り渡すようなやり方はするな。台湾についての譲歩はできるだけ曖昧にしておけ。

このようにニクソンは“日本カード”を切ることをキッシンジャーに指示したのである。

ニクソンは1969年7月の「グアム・ドクトリン」（翌年には「ニクソン・ドクトリン」と改称）では、アジアでの米地上軍のコミットメントを低下させ、現

地地上軍の増強を求めていた。これに照らしても、またその年11月佐藤総理との日米首脳会談での会話からも、日本の兵力増強を求めていたことは明らかである。ニクソンは、あくまで個人的にはあるが、日本の核保有まで黙認していた可能性が高い。従って、上記のキッシンジャーへの指示は、中国が反対し、その廃棄を求めていた日米安保条約の有用性を論拠づけ、また日本への米軍駐留を正当化するための議論だった。北京政府は、1969年11月の日米首脳会談のあとの共同声明に「台湾条項」と「韓国条項」〔註〕が入ったことに大変神経質になり、これは日米安保のアジアへの拡大であると非難した。11月28日付『人民日報』は「米日反動派の悪辣な陰謀」と題した社説で、佐藤訪米を非難。「日本が米国の世界戦略のなかで、アジアにおける憲兵の役割を担い、米日軍事同盟の強化によって新たな侵略戦争を目論んでいる」と。周恩来総理は70年4月7日に北朝鮮を訪問した際には、共同コミュニケで「アメリカ帝国主義の下に、すでに日本軍国主義が復活した」と断じた。4月14日には、日本国際貿易促進協会など7団体と中国国際貿易促進委員会の共同声明で「日本軍国主義がすでに現実の危険」になったと警告した。さらに、11月1日に日本社会党第5次訪中団に対しても、「美帝反対」「日本軍国主義反対」「日米安保条約破棄」「日台条約廃棄」などで合意を求めている。【〔註〕1969年11月21日に発せられた佐藤＝ニクソン首脳会談後の共同声明の第4項のなかに、「韓国の安全は日本自身の安全にとって緊要」「台湾地域における平和と安全の維持も日本の安全にとってきわめて重要な要素」との文言が入った。この「韓国条項」と「台湾条項」は佐藤の帰国後、野党からも厳しく批判された。佐藤は、「台湾条項」は「一言多かった気がする」と、のちに国会答弁で述べた。】

キッシンジャーは世間の目を欺くために、「世界周遊」に出掛けることになった。5名のNSCスタッフ（うち3名のみが北京へ同行）と2名の秘書、2名のシークレットサービスを帯同しての出発という派手な演出だった。実際には、7月29日から31日までの48時間の北京極秘滞在のために12日間をも費やし

た。途中、イスラマバードでヤヒア・カーンの手助けを得たこと、キッシンジャーの仮病、“替え玉”、夜間飛行、たまたま空港でキッシンジャーを目撃した一人の英国人記者（記事はボツとなった）ことなど、すでに語り尽くされているので、繰り返さない。

キッシンジャーのイスラマバード到着前の7月6日に、実はニクソンは重要な演説をミズリー州のカンザスシティでマスコミ幹部に対して行っていた。後知恵的には、かれの「チャイナ・イニシアティブ」をぎりぎりまで示唆するものだった。

この中で意図的に、“Red China”、“Communist China”の代りに、“Mainland China”の語が使用された。

「…私の政権が大陸中国の国際社会からの孤立を終らせるための最初のステップをとることが必要不可欠です。」

「世界の指導者たちとの対話がなく、完全に孤立している大陸中国は世界全体にとって危険なことですし、許されることではありません。ですからこのステップをとらねばならないのです。」

しかし、中西部でのこの演説にマスコミは注意を向けなかった。スピーチの中心部分は“A Resurgent Japan”（甦る日本）の工業力の脅威で、とくに日本の鉄鋼生産量の急増ぶりが具体的に数字を挙げて強調された。このため、中国問題がその陰に隠れてしまった感があった。あるいは、ニクソンが「中国問題」を「日本問題」のなかに忍び込ませたと言うべきか。

これに先立つ6月30日。ある日本人外交官がホワイトハウスへ友人のホルドリジ（John H. Holdrige）にワシントンへの着任の挨拶に行った。ホルドリジは出発準備に忙しそうだった。翌日、キッシンジャーに随行してサイゴンへ旅立つと言う。そして「ボクはこれから重大な旅行に出る。[米国は]古い友人を犠牲にしない。米国の今後の外交はカンザスシティ演説を読め」と怖い顔つきで口走った。当の外交官はそのあとニクソンのスピーチをくり返し読んだが、

当時の状況からして、「古い友人」が南ヴェトナムとしか思えなかった。しかし後で、ホルドリジの友情に感じ入るとともに、自らの至らなさを悔んだという。実は周はこの演説に注目した数少ないひとりだったことはキッシンジャーとの会談のなかに窺われる。

キッシンジャーは北京に7月9日から11日にかけて滞在し、周恩来と4回の会談を行った。最重要のイシューは「台湾」と「インドシナ」だった。しかし、周は「日本」についていたるところで言及した。

例えば、第2回会談で「日本軍国主義者の野望」について、朝鮮、台湾、ヴェトナムのみならず、中国東北部やフィリピンそしてマラッカ海峡までを生命線とみなしている。日本と台湾との間には条約があるから、台湾に日本の兵力が入っていく可能性がある、と述べたあとで、「最悪の場合」と断りながらも、中国は分割されるかもしれない。北をソ連、米国が揚子江の南、日本が二つの大河に挟まれた地域をそれぞれ占領するだろう。「新中国」を護るのに大きな犠牲を払う用意があり、つまり、これは「ヴェトナム人民」も同じだ、などと被害妄想とも思える発言をしている。

これらのトップ会談すべてに速記係として陪席したキッシンジャーの秘蔵っ子のロード（Winston Lord）は帰国後、議事録作成の中心的人物だったが、「周の日本軍国主義への異常なまでの妄執（obsession）」と手書きでコメントした。キッシンジャーも事前にニクソンと打ち合わせはしていたものの、実際に周の口から飛び出してくる言葉の過激さには驚かされたのではないだろうか。

しかし、「日本嫌い」で知られ、また対日不信感を自らも根底にもっているキッシンジャーにとって周に対し“日本カード”をちらつかせて、調子を合せることに違和感はなかったと思われる。日本の軍事的膨張を抑制することは米中両国の共通の利益であり、米日条約はそのことに資するものであるとの論理を繰り返した。

キッシンジャーに惹かれ交際したことのあるフランス人女性ジャーナリスト

の手記のなかに、キッシンジャーが語ったとされる次のような言葉がある。

「日本人はあと10年くらいのうちに極めて国家主義的になる可能性がある。わたしは日本人を潜在的に、ドイツ人よりもはるかに恐ろしいと信じている」。ドイツ系のユダヤ難民として苦労したキッシンジャーにはナチスドイツと軍事同盟を結び、しかもアジアを侵略した日本には根源的不信感があったものと思われる。またかれの日本人嫌いについてのエピソードをひとつ。イスラエルのマイア（Golda Meir）首相に対し、「私はこれから魚臭い日本に行かなければならない。石油に供給制限で困っているのは日本だけだ」と苦々しい顔をしたことが、1973年の第4次中東戦争の際に外電で報道されたことがある。

V 「ニクソン・ショック」

北京でのキッシンジャーの最後の仕事は、自らの極秘訪中とこれからの大統領の訪中について、世界に向けて、米中両国で同時発表する際の文章の内容と発表のタイミングとを話し合うことだった。この発表を米国側は“Announcement”，中国側は「公告」と呼んだ。キッシンジャー・チームと葉劍英（Yeh Chien-ying）中国共産党軍事委員会副主席のチームとの間で、最終日の午前に行われ、後で周も加わった。

たかが「発表」、だがこの短い文案作成に多大な時間とエネルギーが費やされた。両者の微妙な“ずれ”を調整するためだった。7月9日会談で中国側は首脳会談が米国側の要請によるものとの建前をとった。これに対し、キッシンジャーはそれでは首脳会談は“無し”にして、実務レベル会談にしようと応酬した。翌日、中国側が折れた。まさに国家の威信がかかった折衝である。

中国側—米大統領が招待を希望したことを示したい。

米国側—大統領訪中を提案したのは中国の方である。

中国側の“desire to visit”に対し、米国側は“interest in visiting”を提示した。

“desire”は「願望」という強い意志表明である。しかし結果は中国側の立場に歩み寄った“expressed desire to visit”（中国語表現—「表示希望訪問」）となった。

もうひとつ、中国側のドラフトに「関係正常化を話し合うために」とあったが、米国側は、より広く双方の関心事を話し合うために、を主張。両方が採り入れられた。

昼夜を分かたず行われたと言っても過言ではない過酷な交渉を終えて、キッシンジャー一行はイスラマバードへ何食わぬ顔で戻り、そのまま「世界周遊」を続ける。実はキッシンジャーはテヘラン経由でパリへ飛び、北ヴェトナムのレ・ドクト（Le Duc-Tho）を相手に3時間のヴェトナム秘密交渉を行ったのだから驚かされる。このときキッシンジャー48歳。

南カリフォルニアのエルトロ海兵隊基地にキッシンジャーが降り立ったのは、現地夏時間で7月13日午前7時だった。そのままサンクレメンテの「西部ホワイトハウス」で待ち焦がれているニクソンのもとへ直行。キッシンジャーは自分の腹心でホワイトハウスの留守番役を務めたヘイグ（Alexander M. Haig, Jr.）准将と、旅行中、交信を続けたが、会談の「成功」は、アルキメデスの“Eureka”の暗号で、連絡済みだった。ゴルフカートで出迎えたニクソンに対してキッシンジャーは7時20分から9時半まで朝食を共にしながら口頭で詳しく報告した。このとき、除け者扱いで不機嫌だったニクソンの古い友人、ロジャース國務長官にニクソンは少し「消毒された」（sanitized）情報を与え、かれをサンクレメンテの客として遇していた。

キッシンジャーは使命を果たした高揚感のなかで、すでに自分の役割の歴史的な重要性を意識しつつ、機中からヘイグに次のように伝えている。今回の会談は私の大統領補佐官としての経験の中で「最も厳しく、重要で、かつ広範囲に影響力を持つ」交渉だった、と。かれは大統領にあてた報告書の冒頭にも同じフレーズを繰り返した。

「発表」については中国側との折衝のあと2点が決り、キッシンジャーから

ヘイグへ連絡済みだった。

- (1) ワシントン D.C. 夏時間の7月15日午後10時30分(米中同時発表),
- (2) 大統領の中国訪問は「1972年5月以前」(71年12月以降)。

「発表」はニクソンが7月15日にロスアンジェルス市の北、バーバンクにあるNBC放送局から行すが、短いスピーチが添えられた。

このニクソンのスピーチの事前にワシントン駐在の関係諸国の大使に電話連絡する必要がある。連絡先は18か国。だれがどこの国の在ワシントン大使に何時に電話を入れるかの手順が決られた。「ゲームプラン」と呼ばれた。国務長官の立場にあるロジャースが一番損な役廻りだった。かれは台湾(米太平洋夏時間午後6時45分から15分間)や日本(午後7時から10分間)を含む7か国が当てがわれた。キッシンジャーはソ連とインドを受け持った。

7月15日(夜)。ロジャースからの電話との知らせに、牛場信彦大使は恒例の海兵隊レセプションの場から、急遽、マサチューセッツ通りの大使館へ戻った。時計は10時10分(サンクレメンテの7時10分)を指していた。日本では16日朝である。安川壯外務審議官が牛場の電話を受け、官邸に連絡をとる。総理秘書官が定例閣議を終えたばかりの佐藤総理にメモを手渡した。世に言う「3分前」である。

牛場は親しくしているジョンソン(U. Alexis Johnson)国務次官(政務担当)に必死に電話をした。ジョンソンはサンクレメンテへ呼び出されていた。牛場が最初に叫んだのは、「アレックス、『朝海の悪夢』[註]が現実になった」であった。【[註] 朝海浩一郎元駐米大使(在任:1957年5月—1963年4月は、ワシントン駐在当時にNational War Collegeでの講演で、ある日突然米国の対中政策が転換する不安を述べたところ、しばらくしてロンドンの『エコノミスト』誌が「ほぼ正確にその内容をスッパ抜いた」ため、このことが“Asakai's Nightmare”として語られるようになっていた。佐藤側近のなかでも、木村俊夫官房長官は同様の予感に悩まされたひとりだった。】

日本の政治家、外交官に対しては情報リークについての不信感がニクソン政

権サイドに非常に強かった。ホワイトハウスではこの極秘事項を事前に佐藤に伝えるためにジョンソンを日本へ派遣する案も浮上していた。ジョンソンがサンクレメンテに呼びだされたのはそのためだった。しかし、ジョンソンによれば、「ニクソンの“リーク”に対する病的なまでの恐怖心のために」中止された。

中国問題では日米間で密接な対話をするのが1969年の日米首脳会議で再確認されていた。ところが、1970年10月24日の佐藤＝ニクソン首脳会談で、ニクソンは佐藤に対して、「長期的には大陸中国との国交正常化は望ましいが、昨年11月にも申し上げたように、いまはそのときではない。いま必要なのは断固たる態度 (firmness) だ」と語り、着々と進めていた「チャイナ・イニシアティブ」をおくびにも出さなかった。それに先立つ同月6日の岸信介との会談でも、「今、われわれはわれわれの友人 (台湾) に背を向けてはいけない」とミスリードする発言をしていた。71年4月19日付“NSSM124” (“Next Steps Toward People’s Republic of China”) の作成者たちは、5月5日のNSC会議で、中国問題で日本に通告を怠ると、面子を失った日本の政権は倒壊するかもしれないと論じたが、ニクソンは一笑に付した。

キッシンジャーのソ連大使への電話連絡は東部夏時間午後10時 (太平洋岸で午後7時) に決められていた。ところが、キッシンジャーは独断で、ドブリニン (Anatolii F. Dobrynin) をホワイトハウスの秘密の電話へ呼び出し、午後9時にサンクレメンテから直接会話をした。ニクソンは、ドブリニンを人目につかないホワイトハウス東ウイング裏口からの出入りを許していた。これは国務省とは別のチャネルの存在を意味していた。かれは口の堅いことでも信頼されていたし、英語が堪能で通訳を必要としなかった。ワシントンに戻ったキッシンジャーは7月19日、ホワイトハウスにかれを夕食に招き、改めて米中和解がソ連を標的にしたものでないことを強調した。大使の問い掛けに対して、キッシンジャーは北京でソ連の話題はほとんど出なかったこと、中国はソ連よりむしろ日本を恐れていること、日本の急速な経済成長に伴い核保有国になるかも

しれないと神経質になっていること、などと虚実入り交ぜた返答をした。冷戦最大のライヴァルだからこそニクソン政権はソ連に格段の配慮を日頃から示していたのである。

台湾の猛反発は予想されたことだったが、インドも不快感を露わにし、北ヴェトナムは「米中結託」を攻撃した。

米駐日大使のマイヤー (Armin H. Myer) は大使館内の理髪室のラジオでニュースを知った。米駐台大使のマコノイ (Walter McConnogy) も不意打ちを喰らった。

このとき 32 歳のブキャナン (Patrick J. Buchanan) は、7 月 15 日の発表は米国外交の「勝利」(victory) ではあるが、中国にとっては「大勝」(triumph) だと断じ、この外交的転換を 1939 年ソ独不可侵条約にも擬えた。かれは大統領になる前のニクソンにニューヨーク市で秘書官として仕え、ホワイトハウスでスピーチライターとなった。筋金入りの保守派であった。

VI “POLO II”

前回の 7 月訪中の時点で、次回にキッシンジャーがまた北京に戻って来ることは必ずしも自明のことではなかったが、結局かれに落ち着いた。“POLO II”の準備が始った。再訪の具体的な段取りは、パリでウォルターズ (Vernon A. Walters) 陸軍少将 (米大使館付武官) と中国の黄鎮 (Huang Chen) 駐仏大使との秘密チャネルを通して行われた。ウォルターズは副大統領時代のニクソンにスペイン語の通訳として中南米旅行に随行して以来、ニクソンのお気に入りとなった。滅多に人を褒めないキッシンジャーですら、「素晴らしい[フランス語]通訳」とかれを評した。かれは母語である英語のほか、仏、西、伊、独の言語に堪能で、ロシア語にも通じていた。かれはこの職責を果たしたあと 72 年 3 月に CIA 副長官に任命された。

ウォルターズはソ連の諜報員のみならず、自国の CIA や FBI にも悟られな

いように気を遣った。パリの中国大使館へは徒歩で行くか、クルマの場合は遠くへ停め、そこから歩いた。その際、小さな手鏡で後方を映し出すか、度々振り返らねばならなかった。ポンピドゥー（Georges Pompidou）仏大統領の直々の許可のもとキッシンジャーを少なくとも2度フランスに密入国させている。

キッシンジャーは中国側への特別の配慮を欠かさなかった。黄大使にホワイトハウスの秘密の直通電話番号などを緊急時のためとして教え、7月訪中の際、北京で顔を合わせた黄華（Huang Hua）が駐加大使に任命されたことで、かれにもその番号を教えるよう依頼した。

キッシンジャーは71年10月16日に、今度は大っぴらに出発した。主要メンバーは総勢14名。ほかに大統領訪中の際の衛星中継の責任者およびシークレットサービス、また言うまでもないが、パイロットをはじめとする乗務員がいた。周総理の主催した一行の歓迎会には、これら全員が漏れなく招待された。

旅行中のキッシンジャーとの連絡には再度腹心のヘイグが当たった。中東情勢、「緊張が新たな高みに達した」印パ関係など、刻々と動く国際情勢をキッシンジャーへ伝え、キッシンジャーからも指示が出された。またパリの裏チャンネルからの報告もヘイグ経由でキッシンジャーに伝達された。「印パ紛争はキッシンジャーの訪中を妨害する試みかも知れない」とヘイグはキッシンジャーに連絡している。

北京到着前のキッシンジャーへのヘイグからの情報（10/18）。エチオピア皇帝のハイレ・セラシ（Haile Selassie）がイランのペルセポリスでアグニュー副大統領に10月14日に会った。皇帝は中国を訪問したあとイランに立ち寄っていた。中国では毛、周らと会談した。「毛は大統領の来訪を待ち望んでいるが、実りあるものになるかについては懐疑的だ、とハイレ・セラシは語った」ことが伝えられている。翌19日には、印パについてのメッセージを貴方の指示通りに“D”へ渡した、とヘイグからキッシンジャーへ。“D”は不明だが、“Dick”

ことパリの裏チャンネルのウォルターズ少将の可能性が大きい。

出発前のキッシンジャーのために作成され「トーキング・ポイント」がある。7月会談の内容を踏まえたものである。その「ソ連」部分には以下のような箇所がある。

- 米ソは決して中国に対して共謀することはない
- 米=ソ=日が組んで、中国に襲いかかることはない
- SALT(米ソ間の戦略兵器制限交渉)についてはいつでも中国に説明する用意がある
- インドがソ連から大量の武器援助を受けて拡張主義に転ずるだろう、と周は信じている
- 中国が分割されてしまうのではないかと周は惧れている
- ピンポン玉(=ピンポン外交)はソ連を混乱に陥れた
- ソ印平和友好協力条約[71年8月9日、ニューデリーで調印]は軍事同盟であり、明らかに中国とパキスタンとを意識したものである
- ソ連の提案している「核保有5カ国会議」は投げ縄で中国を縛ろうとするもので、絶対に拒否する

このような中国の脅威感、孤立感、は、キッシンジャーの手の内にあるソ連カードや日本カードを切り易くすることであったが、キッシンジャーは中国を安心させることで「チャイナ・イニシアティヴ」を推し進めようとする。

他の箇所には、「中国は米日同盟に楔を打ち込もうとしている」「中国はわれわれに対して日本カードを使おうとしている」との件もある。

キッシンジャーは周との国際情勢についての意見の交換に25時間以上をかけ、コミュニケ(ニクソン訪中時の「上海コミュニケ」となるもの)作成のためにさらに15時間を費やした。

10回に及ぶ周=キッシンジャー会談のなかで、一番多く日本についての言及がなされているのは、22日午後の第4回会談においてであった。南北朝鮮、

南アジア (=印パ紛争), ソ連, 軍備管理にも話が及び, 英文議事録は最多の 40 頁である。すでに既刊書などで紹介されている周の日本についてのカラフルな表現は, この会談録の中に見出せる。「日本には翼が生え, 今にも飛び立とうとしています」と, 「日本は, 米国の手綱 (control) なくしては, いたるところで, 奔馬 (a wild horse) です」である。

周が, 日本の経済大国化が軍事大国へ変身する必然性とそれへの強い警戒感をキッシンジャーに対して率直に表現しているのに対し, キッシンジャーは, ひとつに, 自分自身の対日不信感から, いまひとつは, 周の恐怖心をさらに掻き立てることにより米日同盟の現状維持が中国の国益に適っていることを理解させるため, さらには, 会話の潤滑油, ないしは「チャイナ・イニシアティヴ」促進のために, 相手に迎合する言辞を弄している。

キッシンジャー— 中国には伝統に由来する世界大の (universal) 視野があります。しかし日本の視点は部族的 (tribal) です。

周一 かれらはより狭いということですね。奇妙なことです。かれらは島国ですし, 英国も島国です。

キッシンジャー— 両者は異なっています。日本人は自分たちの社会はとても特異なもので, 何にでも適応できて, それでなお国家の本質を保持できると信じています。それゆえ, 日本人は突如として爆発的な変化を遂げることが出来るのです。かれらは封建制度から天皇崇拜へと 2~3 年で移行しました。天皇崇拜から民主主義へ 3 か月で移行しました。

周一 いまや, かれらは再び天皇崇拜へ逆戻りしようとしています。

周一 天皇に会われたことはありますか。

キッシンジャー— ええ, アラスカで。今朝, 貴国の外交部長に説明しました。
(笑い声)。

周一 とても複雑な人物ですね。

キッシンジャー— そのあと, 儀典長はノイローゼになりました。非常に複

雑です。深遠な (profound) 会話はありませんでした。

キッシンジャー—— 日本人は他の人々の態度に対する感受性を持っていません。…総理のおっしゃった経済成長はそれ自体の不可避性を孕んでいるということには賛成します。そして日本の経済発展のやり方が日本の部族的特徴を示しているということにも部分的に総理に同意します。なぜなら、日本のやり方は多くの国を自分の政策に結びつけようとする目的を持っているからです。ですから、私は日本に対して幻想は抱いていません……自力で自衛する日本はすべての周辺国にとって客観的に危険な存在となるでしょう。より強力になるでしょうから。それゆえ私は、現在の日本の対米関係が実際には日本を抑制しているのだと信じています。もしわれわれがシニカルな政策をとろうとすれば、われわれは日本を解き放ち、自らの足で立つように仕向けるでしょう。これは日中間に極度の緊張を生み出すでしょう。そしてわれわれ米国はその間で双方を操ることになるでしょう。それはとても近視眼的です。貴国か米国のいずれかが、その犠牲になるでしょうから…

(この辺では、キッシンジャーが殆んど一方的に話し続ける。7月訪中直前にニクソンと打ち合わせた“日本カード”のシナリオに沿うものだった。少し置いて)

キッシンジャー—— 日本人が本当に在日米軍基地の撤退を望むときにはいつでもわれわれは撤兵します。われわれはそもそも自分たちのために基地を日本に置いているわけではないのです。もし実際にそうなったときには、あなた方は喜ぶべきではないと思います。なぜなら、ちょうど今日われわれが日本を経済的に築き上げたことを後悔しているのと同じように、貴国もいつの日か後悔することになるでしょう

「われわれはそもそも自分たちのために基地を置いているわけではないのです」の件は、キッシンジャーの本心ではなく、「日本カード」の思い切った一手だったのか、それとも日本嫌いのキッシンジャーは日米同盟すら嫌っ

ていたのか、謎である。

VII コミュニケ作成

ニクソン大統領の訪中の際に発表される共同声明の草案作りには、莫大なエネルギーが費やされた。

まず、米国側が第1次草案を提示したのが、北京滞在3日目の10月22日だったが、中国側の対案は24日朝まで示されなかった。そのあと米国側の第3次草案が25日夜10時に示され、中国側の対案は翌朝(26日)午前4時45分となった。双方を調整した暫定最終案が完成したのは26日午前8時だった。米国チームの帰国予定は25日だったから、北京滞在を24時間延長したことになる。双方の草案の総頁は英文で50頁を超えるものとなった。

難航した理由は、米国側の両国の協調性を打ち出した多分に曖昧な文章に満ちた第1次草案に対して、中国側が革命的イデオロギーの色彩の濃い対案(中国側第1次草案)を提示し、ハードルを高めてしまったことである。この中では、「革命」「人民の革命的闘争」「すべての抑圧的人民の闘争」「諸人民の闘争」などの文字が躍っていた。

この背景を知るうえで同日(24日)に行われた周=キッシンジャー第7回会談の議事録が手掛かりを与えてくれる。周はこの午後の会談で、キッシンジャーに対して、「1時間にわたる火の出るようなレクチャー」を行った。メッテルニヒ主宰のウイーン会議をテーマに博士論文を書きハーヴァード大学教授となったキッシンジャー博士に対して、周は延々としかも滔々と、米国独立革命、フランス革命、神聖同盟などについて「講義」し、「人民」の「進歩」の歴史を跡付けた。キッシンジャーはこれを毛沢東が周に対して「気合い」を入れるべく、叱咤激励した結果だと見た。つまり、毛の革命史観を反映させたものだった。

米国側にすれば、中国第1次案を受け入れることは、北ヴェトナムの闘争を正当化し、米国の不当性を認めることになる。かような革命イデオロギーの言辞に満ちた文案を受け入れることは、ニクソン訪中の際「米国の大統領に屈辱を与える」ことに等しかった。

米国側の強い抵抗の結果か、中国の第3次素案ではイデオロギー色がかなりトーンダウンされた。「解放」の語は使われているが、「革命」は米国側の強い主張に譲歩し「進歩」となった。「闘争」は1か所のみとなった。だが「いかなる外国の介入も絶対に許されない」

「ヴェトナム、ラオス、カンボジアの諸人民の闘争」「すべての被抑圧人民、被抑圧民族による自由と解放のための闘争を断固支持する」がみられる。また「歴史の不可抗力的趨勢」「すべての外国兵力は自分の国ぐにに引き揚げるべし」は残された。

最終草案では、米中双方に根本的な立場の相違 (essential differences) が存在することが明示された。これは中国側の最初からの文言である。また具体的には、中国側がすべての国 (台湾、韓国、日本、沖縄など) からの米軍撤退を主張。米側は日本や韓国へのコミットメントを明示。とくに米日同盟の堅持を謳った。

台湾問題が最大の相違点だったが、中国の立場に米国は「異議を申し立てない」(not challenge) というキッシンジャーの巧妙な外交的修辞法を周が喜んで受け入れ、解決された。

両国とも同盟国へのコミットメントには変更のないことを示さねばならなかった。少なくとも文面上では、中国はヴェトナム問題で米国へなんらの配慮、譲歩も示した形跡がみられない。ついでながら、翌年2月のニクソン訪中時の「上海コミュニケ」では「革命」の語が舞い戻り、1回使用されている。

VIII 中国代表権問題との絡まり

キッシンジャーの10月訪中が決定した時点ですでに、国連での中国の代表権についての表決との関連で、そのタイミングの悪さが懸念されていた。そして、その危惧は現実のものとなり、米国政府は苦しい立場に立たされることになる。

キッシンジャーの7月訪中の際、周は「中国が国連メンバーになっていないことは久しいから、もうしばらく待つことは構わない」「しかし、いかなる形式の“二重代表権”も絶対に受けることはない」と明言していた。10月会談も周は“今年でなければ”と言う熱心な様子は見られない、とキッシンジャーが北京から「ヘイグだけに」と断りながら伝えている。また採決で仮に勝っても得意がってはいけない、とも命じた。

米國務省は長年、台湾の「帰属未定論」の立場をとってきた。キッシンジャー7月訪問のとき、周からこれに対する激しい抗議を受けた。71年8月2日、ロジャース國務長官は「二重代表権」構想を公式に打ち出した。北京の国連加盟には反対しない、しかし台湾追放には反対。中国の安保理議席は総会の決定に委ねる——というものだった。同月の5日と6日、周と黄華駐加大使は米人記者に「中国はこの構想によって議席を受け入れることはない」と反駁した。このため、安保理議席は台湾でなく中国の方に認めると國務省は譲歩した。

こうしたなか、71年9月21日に第26回国連総会が開幕。総会の総務委員会は表決により台湾追放を提案するアルバニア案（アルジェリアなどとの共同提案）の表決を「二重代表権」提案の表決より前に行うと決定した。

キッシンジャー訪中のさなかの10月25日、重要事項提案〔註〕は否決、アルバニア案は採択された。二重代表権提案は投票にすら付されず廃案となった。このとき、台湾は除名を待たずに脱退を表明した。【〔註〕1961年に遡るが、日、米、

豪、伊、コロンビアの5か国が中国の代表権を「重要事項」(Important Question = IQ)とし、単純多数でなく採決には3分の2以上の票を必要とするという決議を指す。】

キッシンジャーの10月訪中のタイミングについては、国連総会の動きに照らして、ロジャース、ブッシュ(George H. W. Bush)国連大使、それに台湾も懸念を示した。しかしキッシンジャーの訪中についての発表はホワイトハウスを通して10月5日に行われた。台湾政府の外交部長である周書階(Chow Shu-kai)によれば、台北側には、この発表について事前の通知がなかった。これは台湾にとって、7月15日、8月15日に続く「3度目のショック」となった。

米政府内では、国務省対ホワイトハウス(とくにNSC)、ロジャース対キッシンジャーの対抗関係が事柄を余計に複雑にしていた。ロジャースは、米中首脳会談の準備でキッシンジャーが果たした役割を来る米ソ首脳会談では自分にやらせてほしいとニクソンに訴えており、ニクソンはまだ決断していない。いずれロジャースの願いを認めるだろう。また国連問題ではロジャースはブッシュを押しつけて、自分を圧倒的に行動力のある人物として世間に印象付けようと務めている。このようにヘイグはキッシンジャーへ連絡した。別の電文でも「ブッシュはお飾りでロジャースが実行部隊」と形容した。

ニクソンは「台湾を犠牲にした訪中」という国務省の批判からキッシンジャーを守るため、キッシンジャーの帰国を遅らせることを考えた。そのため、帰途に給油のためだけでなく、アンカレジに1泊することが決められた。しかし、わざと帰国を遅らせる必要はなくなった。北京でのコミュニケ草案完成が予定より1日遅れたからである。

キッシンジャー一行の搭乗した「エアフォースワン」は10月26日の午前10時30分に北京を出発し、上海を経由して、アンカレジのエルメンドーフ空軍基地に給油のため着陸。日付変更の関係でアンドルース空軍基地には同じ26日夜に到着した。基地のはずれの報道陣の目の届かないところだった。今回の訪中についての発表(announcement)は、最終日の周との話し合いで、米

中同時にワシントン時間 10 月 27 日午後 4 時となった。キッシンジャーはヘイグにこのことについてリークのないように、とくに「ロジャースには見せるな」と念を押した。

ニクソンはキッシンジャーが出来るだけ目立たないように帰って来てほしい、そして真先に自分に会って、6時半に夕食を共にしたい。自分より先にキッシンジャーがロジャースに会わないように神経を使っている、とヘイグは機上の人となっていたキッシンジャーに伝えたのである。

キッシンジャーは回顧録の中で、政権内の或る者は自分の訪中と国連代表権問題とを絡めて、自分の立場を弱めようと企んだ、と憤慨している。この「或る者」とは国務省、とくにロジャースを指していることは容易に想像できる。しかし、国務省のみならず、NSC の国連担当のライト (Marshall Wright) やキッシンジャーの側近のホルドリジですらキッシンジャーの訪中のタイミングが採決での数票を北京に有利に動かした、と分析した。

キッシンジャーはこの 2 つの事柄の絡まりは、「苦痛な偶然の一致」ではあるが、「両者は全く無関係」であることを強調し、ヘイグにもプレスブリーフィングでもこの表現を繰り返した。

IX ニューヨークの裏チャンネル

中国が台湾に代り国連代表権を与えられたが、これに伴い、キッシンジャーが北京で顔見知りの黄華駐加大使が国連大使を兼務することになった (かれは 1953 年の朝鮮休戦交渉に携わったヴェテラン外交官で、この兼務は 1 年続いた。のちに外務次官の要職に就く)。

キッシンジャーの指示で、ニューヨーク市内に黄たちとの密会場所が設置された。中国国連代表部はローズヴェルトホテルの 14 階の 1 角に陣取ったので、密会場所も同じくマンハッタンのイーストサイドにある安アパートに決った。

ニクソン訪中

入口にドアマンもエレベータマンも居ない。会合は夜になってから、中国側のメンバーと米国側メンバーは必ず別々に入ること、など決った。11月22日に、あまりマスコミに顔の知られていないNSCのハウ（Jonathan T. How）海軍中佐が黄大使にローズヴェルトホテル内で会い詳細を打ち合わせた。

キッシンジャーはこの秘密接触ルートにブッシュ国連大使を引き込んだ。最初の密会は11月23日夜に行われた。もうお馴染みになったブルックリン生まれの中国側女性通訳である唐聞生（Tang Was-shen = Nancy Tang）には「ミス・ケイ」の暗号が与えられた。ニクソン訪中よりは、国連に関する事、印パ紛争などの国際情勢が主たる話題になった。

この会談中、キッシンジャーは「ブッシュ氏は直接私のために仕事をする」と言明した。国連大使とその上司の国務長官とを切り離す、“国務省外し”のキッシンジャーの策動だった。キッシンジャーはこの密会についてニクソンに報告した。「この新しいチャネルは国連に関する事項」を話し合うものであること、また黄の態度からも、中国に今年代表権を与えられたことに驚き、むしろ戸惑っており、喜んだ様子はない、などと報告した。

ほどなく、このアパートで何事が起っているのか隣人が訝ることになる。ヘイグにあてられたメモで、今後キッシンジャーが大型リムジンで乗りつけないこと、シークレットサービスがクルマから跳び出して、交通を止めたり、派手な行動をとらないよう警告された。いずれは、密会場所を他に移す必要も訴えている。

X ヘイグ訪中

ニクソン大統領の訪中の前にもうひとつの（そして最後の）北京詣でがあった。キッシンジャーの腹心でこれまで留守番役に徹していたヘイグが総勢44名のぼる先遣隊（advance party）を率いることになった。大統領の実際の訪問の予

行演習の意味合いをもち、テレビ生放送などの技術的打ち合わせが主要任務だった。しかし、コミュニケのなかの台湾に関する米国側の文言をキッシンジャーから託されていたとも言われている。

44人の内分けは、公式メンバー18名（この中にホワイトハウス報道官ジエグラー（Ronald Ziegler）が含まれていた）、技術アドバイザー9名、操縦士ら乗務員17名だった。

先遣隊はニクソン大統領が実際に辿るルートをなぞるよう旅程が組まれた。アンドルースを71年12月29日に発ち、オアフ島のヒッカム空軍基地、グアムを経て、上海経由で、現地時間の72年1月31日の昼下がりには雪に白く覆われた北京に到着した。帰路は上海を1月10日出発し、エルメンドーフ空軍基地（アラスカ）を経て、（時差の関係で）同じ10日にアンドルースに戻った。

ハイグの出発に先立って用意された「トーキング・ポイント」として重要なのは次の3点だった。

- (1) 殆どの米国の報道陣人は浅はかな愚か者（shallow idiots）で表面的なものと雰囲気しか見ない。そのことから大統領が当地〔中国〕で恥（embarrassment）をかかないことが決定的に重要となる。要するに、訪中の結果が大統領の世界的指導者としてのイメージの強化に繋がらねばならない。
- (2) パリとニューヨークの裏チャンネルについて、今回私に同行する者に中国側から明かされないようにすること。その秘密を知っているのは、今回の一行のうちでは私のみであることを中国側に徹底させておくこと。
- (3) 大統領と毛主席および周総理とのすべての会談にキッシンジャーが同席することが不可欠である。こうした会談が行われているときには、同時並行的に外相級会談などの予定を入れて、キッシンジャー以外の国務省関係者や他の随行員がそれら他の会談に出席しているように中国側に予定を組んでもらうこと。

ニクソン訪中

ニクソンのイメージ作りについて、出発前のメモランダムがある。ヘイグがキッシンジャーに宛てたものである。大統領の訪中が1972年大統領選挙のための宣伝行為であるかのような印象を中国側に与えたくない。もし中国側がそのような印象を持てば、交渉は米国にとって大変不利になる。

ニクソンが中国を訪れることに対しては、左右両陣営から批判が浴びせられていた。「リベラル」を売り物にしていたケネディ（Edward M. Kennedy）上院議員（民主党、マサチューセッツ州選出）は、中国の人権問題や、印パ紛争で米国が、対中関係改善のためにパキスタン寄りになり、対印関係を悪化させたことを支払った大きな「代償」と形容した。『ニューヨーク・デイリーニュース』の記者は、ニクソンの訪中と訪ソを大統領選挙の年の「見世物興行」と皮肉った。

ヘイグ訪中は最悪のタイミングだった。71年末に米軍が北ヴェトナムに激しい空爆を再開していた（クリスマス爆撃）。ヘイグは周と2度ほど会談（1972年1月3日、7日）を行ったが、2度とも周はこのことを持ち出し、激しく非難した。

3日から4日に日付の変る夜半に行われた第1回会談で、

周一 昨年末（クリスマス）の空爆によってわれわれは苦しい立場に立たされている。「空爆は不要だった」「中米間には根本的な立場の相違がある」。今も中国国内には批判勢力が はびこっている。「美帝」を洗脳されてきた一般人民が一気に（対米和解という）政策転換を受け入れることがいかにむずかしいか分ってほしい。毛主席はこの政策転換に踏み切ったが、米国大統領の中国来訪が失敗に終わることもありうるとも考えている。

第2回会談も6日から7日に日付の変わる夜半に行われた。周はヘイグへの回答だとして周として空爆を非難するペーパーを読んだ。「タフで、ポレミックなトーンだった」。

ヘイグがヴェトナム戦歴を持つ陸軍軍人で、いわば“ヴェトナム専門家”であること、かれの訪中のタイミングとを口実にして、ソ連がこの爆撃を米中の

共謀によるものと非難した。そして、ソ連が第三世界革命のチャンピオンになろうとしている、と中国は気にしている。周はクリスマス爆撃を厳しく非難するとともに、中国が北ヴェトナムを強く支持していることを強調し、こうしたことは、ニクソン訪中にとっては「好ましからざる要素」だと述べた。かれは、米国が東南アジアで過ちを犯したこと、米軍をヴェトナムへ送り込んだこと自体、「侵略」であること、米軍はカンボジアにも侵攻したこと、タイや米 CIA がインドシナで暗躍していることにも言及した。

ヘイグは空爆についての弁解をしたあと、一転して、中国側の不安を煽る議論を展開した。ソ連は中国への包囲網を形成しようとしている。ソ連は南アジア(=インド)とインドシナ(とくに北ヴェトナム)で援助を強化している。これは米中接近(coming together)の試みに対抗しようとするものである。ソ連は中国を無力化させたあと、米国に敵対してくる、と。

ソ連の動きについては、周はヘイグと認識を共有していた。前年7月15日のニクソン訪中発表の直後にソ印「平和友好協力条約」という名の軍事同盟を結んだ。またグロムイコ(Andrei Gromyko)が訪日した。ソ連はヴェトナム和平の邪魔をしている、インドがハノイの在外公館を格上げしたことなど、ソ連の対中包囲網を証明するものである、などと論じた。

ヘイグは、(中国国内と同様に)米国内にも批判的勢力のあることを持ち出して、ニクソン大統領の抱える問題の深刻さを訴えた。米国内に左翼(親ソかつ親印)と右翼(親台)との奇妙な結びつき(両者はまた中国の人権にも批判的なことで共通していた)が出来上がっていることを指摘し、そのためには、ニクソン大統領のイメージを訪中の成果と見栄え(appearance)の両方で高める必要を強調した。

周は、「イメージ」問題には冷淡だった。中国はイメージ作りには手を貸さない。イメージとは自分自身の行動によって出来るものだ、と突き放した。「相応の外交儀礼と礼儀」は尽くすが、それ以上のことはできない、と協力を拒否

した。

ニクソン訪中時のコミュニケ作成における台湾問題の取り扱いの難しさについては、両者とも十分に理解していた。キッシンジャーの10月訪中時にも解決できなかったことで、課題として残されているとの共通認識を示した。

XI ニクソン訪中の準備

ニクソン訪中までの米中間の連絡や打ち合わせはパリの裏チャンネルを通じて行われた。米国サイドはパリのウォルターズとワシントンのヘイグ間で交信がなされた。

日程については、キッシンジャーの7月訪中時から検討された。(1)大統領の中国滞在期間—米国の「5日案」に対し、中国の「7日案」、(2)中国側は、北京、上海のほか、風光明媚な杭州に1泊することに固執、(3)米国側の大統領夫人同行の提案。10月訪中でも、キッシンジャーはニクソンが5日間を望んでいること、また第3の都市の観光では宿泊せず、日帰りならば承知、と述べた。夫人同伴について、中国側は当初、想定外だったため、不意を突かれた感じになったが、とくに異議はなく、米国次第ということになった。

10月会談ではまた、ニクソンが毛と周にそれぞれ別個に、“差し”の会談を望んでいることを伝えねばならなかったが、キッシンジャーは「慎重に、頃合いを見計らって持ち出す。成功するようやってみる。しかし、重要な会談で周を外すことは大間違いだ」とヘイグに伝えた。キッシンジャーが周にこの問題を持ち出すと、これまで毛主席のどんな会談にも自分は出席しているとの答えが返ってきた。キッシンジャーからの連絡を聞いたニクソンは、別々でなくとも(両者と同時でも)構わない、と引き下がった。しかしその他の者が加わると“ロジャース問題”をひき起す(國務長官は他国では首相の地位に匹敵するのだが)と、“ロジャース外し”が困難になることを指摘した。

中国のキッシンジャーへヘイグから、ニクソン訪中時に台湾の“いたずら”が起こる可能性があり、中国側へ伝えてほしい、との連絡が入った。台湾の参謀本部が大陸に偵察機を飛ばし、写真を撮り、また中国側の反応を見極めることを考えているとの情報があるということだった。

72年1月に入って、ウォルターズ少将が大統領が周総理主催の晩餐会で行う挨拶のテキストを駐仏中国大使館員に手渡した頃のこと。ニクソンを乗せた大統領機を偽りの中国のマークを付けた台湾の軍用機が攻撃を仕掛けて来るかもしれない、との中国側からの情報が入った。ただし、この情報の信憑性を確認中とのことだった。ウォルターズの秘書が直ちにヘイグへ電送した。

同じころのこと。ニクソン訪中と時を同じくして、キッシンジャーの北ヴェトナム側の交渉相手のレ・ドクト (Le Duc Tho) 特別顧問 (政治局委員) が北京へ来ることが判明したので、この2人が会えるように中国がアレンジしてくれないかと打診した。しかし、それは2国間の問題であり、われわれ (中国) は関与しない、と2度にわたって拒否された。

大統領の安全については、当然のことながら、シークレットサービスの頭痛の種だった。とにかくかれらを不安にしたのは、中国側が自国の“主権”にかかわることとして、大統領一行の中国国内での移動は中国の航空機によることを強く主張し、米国が折れたことであった。

ニクソンは自分の外交的成果を米本国はもとより世界中にマスコミを通じてアピールすることを切望していた。ヘイグ訪中の目的の一つは、通信衛星による報道の態勢を整えることにあった。これとの関連で、東京・府中の米軍施設の名が1度ならず挙がった、しかし日本を経由することは中国の面子を潰すことになる。上海の電信施設が実際には使われたようである。セキュリティについては、中国側が5両の装甲車、135人のシークレットサービス要員を、そして大統領宿舎予定の各地には地上通信設備を設置することを約束した。

大統領の訪中日程が確定した。北京到着は現地時間の72年2月21日。滞在

は28日までとなった。これを受けて71年11月29日にホワイトハウスと北京政府との共同（同時）発表が行われることになった（太平洋岸時間の13時、ワシントンの16時）。しかし、それに先立って関係諸国への発表についての事前通告が必要だった。

この事前通告の段取りはまたもや「ゲームプラン」と称され、ヘイグからキッシンジャーへのメモランダム（11/24付）の形をとった。キッシンジャーの意向で、実際にはロードが作成したものと思われる。通告相手国には順序（＝順位）が示されている。（1）英国（ワシントン時間、11/25午後）、（2）仏（25日夜）、（3）西独（25日夜）、（4）ソ連（26日午後が訂正され、27日朝）、（5）台湾（26日午後が訂正され28日に変更）、（6）豪（26日午後）、（7）南ヴェトナム（26日午後）、（8）日本（28日午後が27日に変更）——と日本は8番目に位置づけられた。

こと「中国問題」であれば、まず台湾、そして日本、韓国への配慮がなされてしかるべきである。キッシンジャーNSCの対日評価の低さをはしなくも示したのではないだろうか。キッシンジャーの欧州偏重、白人重視を疑いたもなる。ただし、日本の場合、ニクソン、キッシンジャーともに日本を“リーク”の最悪の国と考えていたので、この点も考慮されるべきかもしれない。

翌72年2月初めに大統領の連邦議会に宛てた外交教書（Foreign Policy Report）が発表された（2月28日付）、毎年、大統領により示されるもので、ニクソン政権にとって3回目のものだが、画期的な内容を含んでいた。「1970年代の米国外交政策—平和の構造の創出」と題され、外交全般に亘るものだが、そのなかで、ニクソン政権のもとでの対中政策の変化を跡付け、正当化し、議会への説得を試みようとする部分が目を惹く。

例えば、「政権のこうした動きはトーキョーからベキンへのプライオリティーのシフトを意味するか」と問いかけながら、「そうあるべきではない」と断言し、米日同盟と対中アプローチは両立するものだと弁じた。台湾との関係も急速に変わるものではなく、外交関係や防衛義務を従来通り、維持していくことを強

調した。

同じ2月初め、キッシンジャーはフロリダ州キービスケインに休養中の大統領に宛てて2点のメモランダムを送った(2/5付, 2/7付)。いずれもキッシンジャーが自分の2度の(とくに10月の)訪中の体験を踏まえて書かれた(実際にはロードらの作成とみられる)啓蒙的(さらに言えば, “指南書” 的)なものであった。

「新しい体験」の小見出しのもとで, 「大統領閣下の中国側との会談は閣下がこれまで経験されたどのようなものとも異なるものです」「会談は, 閣下がこれまでに行われた外交上の会談に比して, はるかに(内容的に)厳しく長いものになるでしょう」と警告する。中国側は“ちゃちな”外交上の取引(台湾も含め)ではなく, 米国外交の方向性と(中国から見た)信頼性を求めて来るでしょう, とも注意を促す。かれらは狂信的な革命家であると同時にリアリストでもあり, (ソ, 日, 印などの)外部からの攻撃に曝されていることも十分承知している。かれらは歴史が自分たちの側にあると考えている。これら指導者は70歳台にあり舞台を去る前に一定の目標に到達したいと望んでいる。

中国は「真の平和は正義があって, はじめて成り立つもの。正義なしには, 平和とは抑圧的なものであり, 永続きしない」と主張しており, 米中間で意見の不一致が生じるでしょうが, 「閣下はこの不一致を率直に認めるべきです」。

末尾にある, 周と毛についての考察はキッシンジャーが訪中で実感したことに基づいている。「周はこれまで私の会った政治家のなかで最も強烈な印象を与えられた, ドゴールにも伍する人物です」。毛が「哲学者, 詩人, 大戦略家, 部下を鼓舞できるリーダー, ロマンチスト」であるとすれば, 周は「戦術家, 行政家, 交渉者, 細部に詳しく, [フェンシングで言う]突いて来り, はぐらかしたりする達人」です。この2人の組み合わせは「真に堂々たる手強いコンビ」です。

2月9日の別のメモランダムでは, キッシンジャーの訪中時の10月24日会談を象徴的な例として, 周と毛との関係を説明した。毛からの命令で周の態度

が高圧的なものに急変し、激越な言辞を弄したこと、を象徴的な例として毛こそが周の「ボス」であることを痛感させられたとも述べている。

ニクソンはこれらのメモランダムにアンダーラインを引いたり、書き込みしたりしている。ほかにも、大統領のために NSC が用意した 100 枚に及ぶブリーフィングペーパーがある（日付不明）。事項や国名などの 13 項目に分れている。

インドシナ。中国はインドシナ全体をハノイの勢力が支配することは望まないのではないか。その時にソ連がハノイをその支配下に置く可能性があるからだ。中国は米国の撤退を求める一方で、ソ連の進出を怖れている。しかし、中国がハノイに対して、適切な戦争終結をするよう影響力を行使すれば、インドシナにおける“米中の共謀”の口実をソ連に与えることになる。従って、中国はハノイに対して影響力を行使しないだろう。

日本。中国から見れば「反動的な日本政府」はこれまで「美帝」と協力して日本の軍国主義を復活させ、中国を包囲しようとしてきた。加えて、「南朝鮮の反動主義者」「蘇連修正主義者」（今や「社会帝国主義者」）、それに「インドの膨張主義者」たちが、中国を包囲しようとしている。中国は、米日安保条約、米国の沖縄と日本本土の基地、それに台湾と南朝鮮の安全は日本にとって重要との声明 [1969 年 11 月の米日首脳会談の共同声明における「韓国条項」「台湾条項」] とに神経をとがらしている。

中国側の主張は、米日安保条約の破棄と日本の中立化。米国の立場は、米日同盟の解消は中国にとって逆効果になることを悟らせることである。独り歩きする日本は核武装を含む重武装の方向へと歩み出す。安保条約は日本に対する抑制効果を持っている。米国は日本が台湾や朝鮮半島に進出するようなことはさせない。

ロジャース国務長官の名で、ニクソンへ宛てたメモランダム「台湾の将来」では、台湾が本土から分離している状態を中国が黙認しても、また（より可能性は低い）台湾との平和的統合が実現しても米国としては受け入れる用意が

あると述べている。この国務省の立場について、NSCのホルドリジとロードがコメントし、国務省はこれまでの長年に亘る反共・親台の立場からの「大規模な移行」を示し、われわれNSCの立場に近づいた、としたうえで、ただし北京政府が台湾に対して抱いている領土的執着心の激しさを過小評価している、と批判した。

XII ニクソン訪中

ニクソン大統領はパット（“Pat”（=Patricia））夫人とともに予定通り、上海を経由して、1972年2月21日に北京に到着し、28日まで中国に滞在した。公式代表団15人、随員21人、マスコミ約80人などの総勢370人余が大挙して中国に押し掛けたわけである。ニクソン夫妻の一举一動が大々的に報じられる、マスコミの一大イベントと化した。

ニクソンは、その間1回の毛主席との会談、5回の周総理との会談、2回の全体会議に臨み、28日に「上海コミュニケ」を発表することになる。

キッシンジャーが北京の宿舎に落ち着くや否や、周が来訪。午後2時30分から10分間程度の会話が合った。

周一 毛主席が大統領にお会いしたいと申しております。

キッシンジャー— ウINSTON・ロードを同行させていいですか。

周一 国務長官が怒りませんか。

キッシンジャー— かれには黙っています。少し経って発表すればよい。

こうして歴史的な会談からロジャースは排除されることになった。ニクソンとキッシンジャーおよびNSCの官僚嫌い、国務省外し、ロジャース外しは徹底していた。それは北京での宿舎の配分にまで表れていた。ロジャースは外相会談（「カウンターパート会談」）と全体会議への出席しか許されず、ニクソン＝周会談にはキッシンジャーがすべて出席したが、ロジャースは外された。この

ほか、コミュニケ作成を目的としたキッシンジャーと喬冠華（Chiao Kuan-hua）外交部副部長との会談が持たれてたが、ロジャースはこれに招かれなかったばかりか、進展中のコミュニケの内容についてすら知らされなかった。キッシンジャーの腹心で留守番役のヘイグは2月24日付で「ロジャースを重要会議から外したことに国内で批判が起っている」と伝えた。キッシンジャーはのちに「國務長官はこの歴史的な場面〔ニクソン＝毛会談〕から外されるべきではなかった」と回顧録ではしおらしいことを書いている。

突然呼び出された感じだったニクソン＝毛会談は北京到着日（21日）の午後2時50分から約1時間行われた。米国側は大統領、キッシンジャーに34歳のロードが速記係として加わり、計3名。中国側も毛、周、と外交部儀典局副局长の3名。しかし、通訳は中国側からの1名のみ。キッシンジャー7月訪中以来なじみの、ブルックリン生まれのナンシー・タン（唐間生）だった。会議は基本的に儀礼的なものだった。途中で毛が「私は右翼が好きです」と意表を突く発言をした。キッシンジャーは「左寄りの人は親ソですから」と応じた。日本について、ニクソンは既定の路線を述べた。より重要なことは、この会談の持ったシンボリズムであろう。毛は高齢（1893年生まれの78歳）で病気がちだったとはいえ、遠来の客でかつ世界の“覇権国”の最高指導者を予告もなく突然、中南海の私邸に呼びつけたことではないだろうか。まさに中華帝国の皇帝が夷狄を引見し、叩頭させるさまを想像させる。

このあと、キッシンジャーの宿舎へまたもや周が訪れる。すぐ行われる予定の第1回全体会議についての打ち合わせだった。4時15分。冒頭、キッシンジャーは周に対して、國務省に隠していることを中国側に口止めした。こコミュニケ草案、ニューヨークの裏チャンネル、米ソ関係や印パ紛争について話し合った事実などである。この場にいたのは、両者のほかにはロード、喬、外交部欧州太平洋局長。それに中国人通訳1名、中国人速記者1名だった。打ち合わせは5時30分に終了。

このとき、大統領が毛主席と2度目の会談を行うかどうかの話し合いがあった。周は毛の体調のことを口にしながら、明言を避けた。キッシンジャーはすぐさま抗議した。「主席に呼び出されるまで大統領がじっと待っているというのは間違っています。大統領の威厳にそぐわないことです。」結局、第2回会談は無かった。ニクソン自身も2度目の会談にあまり意味を見出せなかったことも理由のひとつだった。

ニクソン＝周会談は22日から28日の間に5回行われ、国際情勢全般が話し合われた。23日午後の第2回会談では、周から日本への警戒感が表明された。ニクソンは米日同盟が太平洋の平和に寄与していると応酬し、中国が強い独立国で隣国が中国分割に乗り出さないことが米国の利益だとも答えた。途中、中国側の情報管理の徹底ぶりを褒めるとともに、日本の情報管理の不徹底を笑い種にした。

ロジャース国務長官と姫鵬飛（Chi Pen-Fei）との「カウンターパート会談」は5回開かれた。(1)外交関係を持たない両国の接触方法、(2)人的交流、(3)貿易、の3点が話し合われた。

しかし、ニクソン訪中のなかで、実質的に最も重要で多大のエネルギーと時間が費やされたのは、コミュニケ作成のためのキッシンジャー＝喬会談だった。“外交交渉とはまさにこういうものだ”と実感させるものである。会談は友好的雰囲気の中で進められながらも、コミュニケのワーディング（とくに台湾関連）をめぐる双方の相違をいかに埋めるかの2人の懸命の努力が見られた。喬がキッシンジャーと堂々と渡り合っている様子も浮かび上って来る。

22日の打ち合わせがあり、23日から11回にも亘る両者の昼夜を分かたぬ交渉が「上海コミュニケ」を生み出した。キッシンジャーについては、かれはこのほかにニクソン＝毛会談、ニクソン＝周会談、全体会議にも顔を出している。ニクソン夫妻が北京近郊や杭州の観光を楽しんで、報道陣のスポットライトを浴びている間にも、かれはコミュニケのことにかかり切っていた。それ

でも、かれの秘密主義が、後述の如く、最終段階でかれ自身を苦境に陥れることになる。会談の最中にも、キッシンジャーはユーモアを絶やさないが、「睡眠3時間」とか、また2度ほど「もし倒れたら部下に任せる…」と冗談めかしながらも、本音を漏らした。会談中、少なくとも2度、かれは日本が秘密を守れない国だと言って、中国側を笑わせている。

第2回目(23日)の会談で驚愕すべき事実が、会議録から浮かび出た。この日に限り、喬外交部副部長と外交部の局長1名といういつもの顔触れに加えて、中国軍部の事実上の最高指導者が出席した。中国共産党軍事委員会副主席の葉劍英(Ye Jian-ying)だった。全体会議では周総理に次ぐ席順である。事実上の国防大臣であり、林彪(Lin Biao)事件のあとかれの後任となった人物だった。

「見返りはいらない」と断りながら、キッシンジャーは地図や偵察写真を手に、極東ソ連でのソ連軍の兵力配備状況と能力についてこと細かに、具体的に説明を続けた。文書にして10枚分である。陸上兵力については、極東軍区、トランスバイカル軍区、モンゴリア、中央アジア軍区、シベリア軍区、内陸部軍区ごとに、歩兵師団、戦車師団機動ライフル師団、ミサイルの数。空軍力については、極東防空区、トランスシベリア防空区、タシケント防空区ごとに、爆撃機、戦闘機の機種と数。戦慄を覚える内容である [MacMillan (2007) 242-243 もこのことに言及している。Garthoff (1994) 261-262 によれば、7月訪中、10月訪中でもキッシンジャーは中国側にソ連の軍事情報を提供した。このことについては、ニクソンのみが知り、ヘルムズ (Richard C. Helms) CIA 長官にも知らされなかった。]

なぜ、キッシンジャーがこのような一見破廉恥な行動に出たのだろうか。中国は米ソが“共謀”して自国に当たるのではないかと強い疑心暗鬼にあったが、その警戒心を解くことがまず考えられる。米中首脳会談のあと、米ソ首脳会談が開かれることが公にされていた。そしてすでに米ソ(や他の西欧諸国)のさまざまな会談や合意が成立ないし進行していた。ベルリン4カ国協定(71年9月

仮調印、72年6月正式調印)、全欧安保協力会議(CSCE.準備会議—1972年11月—12月)、中欧における相互兵力均衡削減交渉(MBFR.73年10月本交渉開始)。ほかにも、米ソ偶発戦争防止条約、包括的核実験禁止条約、生物兵器禁止条約、月面条約、米ソ民間航空協定、米ソ経済協定、環境問題協定、それに、米ソ軍備管理交渉(SALT)はとくに核保有国となった中国にとって気懸かりな進展だった。

キッシンジャーは、「すべての交渉で、ソ連は世界の2極構造を確立したかの印象を作り出しています」「2国で共謀しているかの印象を与えないためにも、ソ連の5大核兵器国会議の開催[中国が反対していた]に米国は同意しなかった」「中国に対して米ソが共謀している印象を与えないためにも、米国のソ連との交渉事について全て細心の注意を払って情報を提供します」などと伝えた。

キッシンジャーはまた葉に対して、印パ紛争のことで、ソ連が中国に攻撃を仕掛けてくる可能性があるが、中国は自分の直面している危険を分っているのか、と揺さぶりをかけた。ニクソン、キッシンジャーともにソ連が仮に中国を支配することになれば、世界の地政学的バランスが崩れることを強く懸念していたことも動機のひとつと考えられる。別の言い方をすれば、中国がソ連に対するカウンターバランスになってくれることを望んでいた。しかし、キッシンジャーの細部にわたる中国への軍事情報の提供は、かつての朝貢制度の頃の“貢物”にも見えてくる。やはりキッシンジャーとしては、この米中首脳会談を何としてでも成功させたかったのであろう。

この頃、ソ連の方も米中の“共謀”について疑心暗鬼だった。ニクソン訪中に先立って行われたキッシンジャーとグロムイコソ連外相との会談のなかで、グロムイコは、米国が対中関係改善に乗り出したことには反対しない、しかし両国が“共謀”することには反対すると述べた。

2月24日以降もコミュニケ文案で揉めていた。24日には、中国側の文案に

「革命」の語が復活した。台湾をめぐる対立が融けなかった。台湾は中国の「一省」(a province) との中国側の文案は米国側には受け入れ難かった。この年(1972年)は大統領選挙の年でニクソンは再選を狙っており、“中国に台湾を売り渡した”との印象を米国民に与えるわけにはいかなかった。

中国側は、台湾からの米軍撤退が「順次」(progressively)であることには異議はなかったが、「最終的に完全な撤退」(a final withdrawal)の語が入らないことは受け入れられないとの姿勢をとり続けた。キッシンジャーは曖昧にしておきたかった。日程も詰まってきており、翌日(26日)は北京を離れ、杭州へ向うことになっていた。

喬は周の意見を確認し、午後に回答を読み上げた。キッシンジャーは喬にテキストを見たいと言って、中国側文案を手にとった。そこには“the progressive reduction and final withdrawal of all US forces and military installations from Taiwan”とあった。これはニクソンにとって深刻な政治的結果をもたらす事柄であり、キッシンジャーは伺いを立てねばならない。休憩時間にキッシンジャーはニクソンに会おうとしたが、ニクソンは午睡の最中だった。この日のキッシンジャー＝喬会談は翌26日の午前1時40分まで続いた。対立は融けず、台湾についても両論併記が決定的となった。

キッシンジャーは26日に杭州でロジャースにコミュニケの全文でなく台湾に関する個所のみを見せると喬にも告げた。私はリークを恐れている、ロジャースは信用できるが、その下僚たちは別だ、ともキッシンジャーは述べた。他方コミュニケ作りに関与したとの意識をロジャースに与えて、國務省の支持を得る必要がある。

ところが、最終段階でキッシンジャーは躓いた。2月26日深夜から払暁にかけてのキッシンジャー＝喬会談で、キッシンジャーが韓国と日本の個所を修正したいと言い出したのである。喬は愕然とする。「いま26日の深夜、明日[上海で]公表。現在の文案でそれぞれの最高指導者の了承を得ている。明日、公

表できなくなる。」「あれだけ長い時間を〔貴殿の最初の来訪以来〕費やした」。キッシンジャー「その通りです」。喬「北京での5日間は殆んど台湾問題に費やされた」「最後の5分のところで、また蒸し返している」。キッシンジャー「ご尤もです。私の至らなさのせいです」。さすがにキッシンジャーもこのとばかりは神妙だった。喬「毛主席はエドガー・スノウ氏に明かしたようにニクソンとの首脳会談が失敗に終わっても構わない。中国の台湾問題についての感情にはとても強いものがある」「私の立場がない。みな疲れ切っている」。

このキッシンジャーの躓きはやはり極端な秘密主義、国務省外しに帰せられるべきであろう。杭州で一体何があったのかについて、キッシンジャー回顧録は黙して語らず、である。しかし Green et al (1994) 146-147; 161-165; Tyler (1999) 138-140; Mann (1998) 48 が舞台裏を明かしてくれる。

簡単に記せば、キッシンジャーより見せられたコミュニケ草案の台湾の個所をロジャースはグリーン (Marshall Green) 国務次官補 (東アジア担当) に見せた。グリーンは一読して咄嗟に日本や韓国への相互防衛条約遵守の項があるのに引き換え、台湾との条約については一言も文言が入っていないことに気付き、ロジャースに伝えた。米国内で批判が噴き出すのは必至である。キッシンジャーがおずおずとニクソンを宿舎に訪ね、このことを伝えると、ニクソンは激怒した。瀟洒な宿舎のなかを下着のまま動き廻りながら、国務省の官僚制を罵った。ロジャースもニクソンに会った。このあと、キッシンジャーはグリーンに「コミュニケにケチをつけた」と憤りをぶちまけた。このときばかりは誇り高いグリーンが敢然とキッシンジャーに反論した。

喬に対して、キッシンジャーは「このコミュニケは米国内で政治問題化する恐れがある」「“台湾コミュニケ”として米国内で受け止められては困る」などと粘った。そして最高指導者たちも結局キッシンジャーの修正を認めたようで、今日、われわれの知る28日付の「上海コミュニケ」となった。のちの説明文書(3/8/72)のなかに次の件がある。「韓国と日本については、意図的に条約へ

の言及を除去した（しかし、それぞれの国との結びつきや支援については強力な用語を用いた）こうして、台湾との条約の問題を迂回できた」。具体的には「相互防衛条約上の義務は引き続き遵守する」が最終コミュニケで姿を消した。代って、韓国については、「緊急な結びつきを維持する」、日本については、「日本との友好関係を最高度に重視しており、現存の緊密な結び付きを引き続け発展させる」と言い換えられた。

上海での昼間の喬との会談の終りの方では、夕刻に予定されていた米国側のプレスブリーフィングについて、キッシンジャーは独り語りのように述べている。

- (1) 米国の台湾への条約上のコミットメントについて聞かれるはずだが、大統領の議会向け外交教書で述べた通りだ、とだけ答える（大統領はこのなかで台湾へのコミットメントを明言していた）。
- (2) 何か秘密はあるか？と訊かれたら答は、「ノー」だ。コミュニケで明言されていないことで何か話題になったかときかれても、「ノー」と答える。
- (3) 毛主席の健康状態についての質問が出れば、「健康だ」と言うておく。
- (4) 記者会見にはグリーンを同席させるが、喋るのは私だ。

この(4)は“アリバイ作り”であることが明々白々である。

同じ会談のなかで、23日に軍事情報を漏らした相手の葉軍事委員会副主席にもう一度、15分間位会う約束があるが、いつ会えばよいか、と喬に問うている。このあとの深夜にかけての会談でキッシンジャーは喬にもまたソ連軍の配備状況を説明した。

上海到着後、ニクソンと周が修正されたコミュニケにイニシャルをした。「上海コミュニケ」（2月28日付）は1日早く同行のプレスに配布されたおり、夕刻にキッシンジャーはブリーフィングを行った。予め、ロスアンジェルスタイムズ記者にしよっぱなの“やらせ”の質問をさせた。「なぜ米国政府は台湾との条約へのコミットメントを[コミュニケで]明示しなかったのか」と。キッ

シンジャーは2月9日の大統領の議会向け外交教書のなかで、台湾へのコミットメントが述べられており、そのことには変わりはない」と答え、あとはこの一点で押し通した。グリーンもニクソンに言い含められ、いやいや出席したが、キッシンジャーが30分間ほとんどひとりで喋った。グリーンが口を出したのは、キッシンジャーの発音の出来なかった自分のカウンターパートである喬冠華の発音をキッシンジャーに代ってしてやったこと位だった。

上海での最後の日に、周は個人的にロジャース国務長官のホテルの部屋を訪ねた。今回、ロジャースや国務省関係者が蔑ろにされたことへの周特有の気配りだった。

台湾問題は共和党右派にとっての試金石だった。ブキャナンは配られたコミュニケを見て、愕然となり憤激し、キッシンジャーのプリーフィングへの出席も取り止めた。そもそもブキャナンは共和党右派對策として一行に加えられていた。ニクソンの長年の個人秘書ウッズ (Rose Mary Woods) も「あんな奴ら (these bastards) に [台湾を] 売りわたした」と激昂していた。彼女はブキャナンの良き理解者だった。その夜 (28日) の周主催の中国での最後の晩餐会には二人とも渋々出席した。

グリーンは上海で大統領一行と別れ、日本へ直行し、そのあとアジア、太平洋の13カ国への報告の旅に出た。ロジャースの進言でニクソンがグリーンに命じたことであった。ニクソンは帰途、機上から佐藤総理あてのメッセージを打電するという配慮も示した。グリーンにはNSCのホルドリジが随行した。東京では、佐藤と福田赳夫外相に、“中国では裏取引がなかった”ことを強調した。

台湾では、蒋介石総統がグリーンに会うことを拒否。行政院長に就任していたその子息の蔣経國が会ってくれた。

ニクソンはワシントンに戻るや議会での演説が待っていた。大統領専用ヘリコプターが議会の庭に到着する時刻をテレビのプライムタイムにぴたりと合わ

せ、外交成果を最大限にアピールした。その舞台裏には、29歳のホワイトハウス補佐官チェイピン（Dwight L. Chapin）の数月に亘る綿密は計算と“POLO II”随行の体験があった。それは、秋の大統領選挙を睨んだ「チェイピンの最高傑作」だったし、それはかれの上司であるホルドマン首席補佐官の功績でもあった。

XIII おわりに

1968年の大統領選挙がニクソンにとって薄氷を踏むような勝利だっただけに、72年選挙での楽勝に執念を燃やしていた。対中（72年2月）、対ソ（72年5月）の外交的成果や「[ヴェトナム]平和は間近」との10月末のキッシンジャー発言などにも助けられて、11月7日の選挙でニクソンは歴史的圧勝を飾った。総投票数の60.8%に相当する4,600万票を獲得し、50州のうち49州を席捲した。選挙人数は520。相手候補の民主党上院議員（サウスダコタ州選出）、マクガヴァン（George McGovern）は、専らヴェトナム反戦を掲げて戦ったがマサチューセッツ州と「ワシントン特別区」（首都）を手にしたのみで、地元州でも敗北するという屈辱を舐めた。獲得総投票数2,850万票で17人の選挙人だった。（それでもニクソンは不満だった。1964年のジョンソンのゴールドウォーターに対する圧勝の記録には及ばなかったからである。）ニクソンは2期目の終わりまでには、中国と国交正常化を達成する心積りだった。ウォーターゲート事件による1974年夏のニクソン辞任でその望みは絶たれた。

ニクソン大統領の「チャイナ・イニシアティヴ」と訪中は、8億の人口を抱えながら孤立状態に陥っていた中国を、暴発させないために、国際社会に引き入れ、責任ある行動をとらせよう、という今日用語で言う「関与政策」的発想と、ニクソンの“ロマンチズム”との結びつきに触発されたものである。

ニクソンは回顧録に次のように記した。

「このあと20～30年の間に対中関係をさらに改善しなければならない、との信念を北京滞在中に深めた。さもなければ、われわれはいつの日か、世界史のなかに存在する最強の敵と相まみえることになるだろう」。

多くの先行研究のように、ニクソンをこの対中戦略の「先導者」「機関士」だとして、キッシンジャーを「追随者」「いやいやながらの乗客」に譬えることは、確かに歴史の一断面を示すものである。

キッシンジャーは対中和解の可能性が極めて低い、と懐疑的に見ていただけでなく、長期的観点からの中国への警戒も怠らなかった。この点で言えば、キッシンジャーはニクソンより一歩先を見越していたとは言えないだろうか。

キッシンジャーは当初、まず、米国外交が突然シフトすることに同調できなかった。しかし、次のようにも、その現実的思考を表現している。「たとえ弱く、内向きの中国であっても、その図体の大きさは近隣の小国に潜在的脅威となる」、米国にとっての国益は「比較的対外侵略性の少ない、孤立主義を維持する中国を変えようとするものなのか」ということである。「米国は中国が世界的強国として国際政治裡に立ち現れ、ソ連と同じように米国と競争することを本当に望むのか」「なぜ、中国を国際社会に引き込むことが必然的にわれらの利益になるのか」と。

しかし同時にキッシンジャーは自分の外交構想の中心に絶えず据えられていたソ連に対して、中国が圧力として働くことも十分意識していた。ニクソンは米中和解と米ソ軍備管理とを軸に「平和の構造」の構築を唱え、あたかも中ソに対して等距離外交をとるかの姿勢を見せた。しかし、実際には中国にソ連の軍事情報を提供するなど、中国をソ連へのカウンターバランスとして梃子入れをしており、印パ紛争を機にこの側面はより鮮明となった。

ついでながら、ニクソン個人は日本を中国に対するカウンターバランスにしようと考えていたことを示唆する発言もある。結果的に見れば、「平和の構造」の構築も、対中、対ソ「デタント」も“形を変えた対ソ封じ込め”“形を変え

た冷戦の継続”と呼ばざるを得ない。

ニクソン一行が中国へ飛び立つ3日前に、キッシンジャーは大統領に次のように語った。

「これからの15年間、われわれはソ連に対抗するために、中国寄りにならねばなりません。全く非情緒的に (totally unemotionally) われわれは勢力均衡ゲームを実践せねばなりません。ロシア人の行動を正し、律するために中国人を必要とします。」

しかも驚くべきことに、キッシンジャーは「マオタイ酒もウォッカも両方飲む」との表現で、米国の対中和解が米ソ関係を（テタント政策）破滅に追い込むことはない。中国とソ連の双方を手玉にとる「三角外交」を実践できる、との過信があった。結果は、周知の如く、対ソ「テタント」は短命に終わる。

一方、キッシンジャーはドブリニンとの71年8月7日の会話で、「世界にとっての真の危険は中国と日本が結び付くことだ」と述べている。ドブリニンも警戒すべきは7月15日の「ニクソン・ショック」が日本を中国に接近させ、“中日協商”が形成されることだ、と述べている。

米中の“反ソ同盟”的性格はカーター (James Earl “Jimmy” Carter, Jr.) 政権期に一層鮮明となった。この意味では米国は翳りの出始めた覇権の立て直しのために中国を道具として使ったともいえる。しかし、40年を経たいま、その覇権が中国からの挑戦を受けつつある。

ニクソンの「関与政策」とキッシンジャー的な脅威認識とは、歴代の米国政権の対中政策のなかに併存しながら、あれから40年を経た今日に至るまで一貫して続いているのである。

【資料】

本稿では、時間とスペースの制約で、註を割愛せざるを得なかった。他日を期したい。

一次資料

殆んどが「ニクソン大統領文書」(“The Nixon Presidential Materials Project” at the National Archives II, College Park, Maryland) の内の National Security Council Files Collection で、わずかながら国務省文書の RG 59, POL Japan と POL 7 Japan (同上公文書館収蔵) を利用した。

この NPMP の資料は 2010 年の時点で “The Richard M. Nixon Presidential Library and the Birthplace” at Yorba Linda, California へ移管されつつある。

二次資料

- Aitken, Jonathan (1993) *Nixon: A Life* Washington, D.C.: Regnery Publishing, Inc.
- Brandon, Henry (1972, 1973) *The Retreat of American Power* New York: A Delta Book.
- Dallek, Robert (2007) *Nixon and Kissinger: Partners in Power* New York: HarperCollins.
- Dobrynin, Anatoly (1995) *In Confidence: Moscow's Ambassador to America's Six Cold War Presidents* New York: Times Books.
- Garthoff, Raymond L (1994) *Détente and Confrontation: American-Soviet Relations from Nixon to Reagan* (Revised Edition) Washington, D.C.: The Brookings Institution.
- Gergen, R. David (2000) *Eyewitness to Power: The Essence of Leadership: Nixon to Clinton* New York: Simon & Schuster.
- Haig, Alexander M., Jr., (with Charles McCarry) (1992) *Inner Circles: How America Changed the World: A Memoir* New York: A Time Warner Company.
- Haldeman, H.R. (with Joseph DiMona) (1978) *The Ends of Power* New York: Times Books.
- Hoff, Joan (1994) *Nixon Reconsidered* New York: BasicBooks.
- Ishii, Osamu (1993) “China Trade Embargo and America's Alliance Management in the 1950's: The Japanese Case” Chinese Association for American Studies and Institute of American Studies, CASS, eds., *The United States and the Asia-Pacific Region in the Twentieth Century* Beijing: Modern Press.
- Johnson, U. Alexis (with Jef Olivarius McAllister) (1984) *The Right Hand of Power: The Memoirs of an American Diplomat* Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc. [U. アレクシス・ジョンソン (増田弘訳) (1989 年) 『ジョンソン米大使の日本回想』草思社]
- Kalb, Marvin and Bernard Kalb (1974) *Kissinger* Boston: Little, Brown and Company.
- Karnow, Stanley (1984) *Vietnam: A History* New York: Penguin Books.
- Kissinger, Henry (1979) *White House Years* Boston: Little, Brown and Company.
- (1994) *Diplomacy* New York: Simon & Schuster.
- MacMillan, Margaret (2007) *Nixon and Mao: The Week That Changed The World* New York: Random House.

- (2008) “Nixon, Kissinger, and the Opening to China” in Fredrik Logevall and Andrew Preston (eds.), *Nixon in the World: American Foreign Relations, 1969–1977* New York: Oxford University Press.
- Madsen, Richard (1995) *China and the American Dream: A Moral Inquiry* Berkeley: University of California Press.
- Mann, James (1999) *About Face: A History of America’s Curious Relationship with China, From Nixon to Clinton* New York: Alfred A. Knopf.
- Myer, Armin H. (1974) *Assignment: Tokyo: An Ambassador’s Journal* Indianapolis: The Bobbs-Merrill Company, Inc.
- Nixon, Richard (1990) *RN: The Memoirs of Richard Nixon* New York: A Touchstone Book, [Originally published: New York: Grosset & Dunlap, 1975]
- (1967) “Asia After Viet Nam,” *Foreign Affairs*, Vol. 46, no. 1 (October 1967) pp. 116–123
- Reeves, Richard (2001) *President Nixon: Alone in the White House* New York: A Touchstone Book.
- Reischauer, Edwin O. (1986) *My Life between Japan and America* New York: Harper & Row.
- Safire, William (1975) *Before the Fall: An Inside View of the Pre-Watergate White House* New York: A Da Capo Paperback.
- Small, Melvin (1999) *The Presidency of Richard Nixon* Lawrence, KS: the University Press of Kansas.
- Walters, Vernon A. (1978) *Silent Missions* Garden City, NY: Doubleday & Company.
- 朝海浩一郎 (1988年) 『花みづきの庭にて——ある外交官の回想』朝海浩一郎回顧録編集会
- 池田直隆 (2004年) 『日米関係と「二つの中国」——池田、佐藤、田中内閣期』木鐸社
- 石井修 (1987年) 「対中禁輸と日本の経済自立」『国際政治』第85号 (1987年5月)
- 半場信彦 (1989年) 『外交の瞬間——私の履歴書』日本経済新聞社, 1989年
- 緒方貞子 (添谷芳秀訳) (1992年) 『戦後日中・米中関係』東京大学出版会
- 楠田實編 (1983年) 佐藤政権・二七九七日』(下) 行政問題研究所出版局
- 楠田實 (和田純編) (2001年) 「楠田實日記——佐藤榮作総理首席秘書官の二〇〇〇日」中央公論新社
- 佐藤榮作 (伊藤隆監修) (1997年) 『佐藤榮作日記』第4巻, 朝日新聞社
- 張紹鐸 (Zhang Shaoduo) (2007年) 『国連中国代表権問題をめぐる国際関係 (1961–1971)』国際書院
- 千田恒 (1987年) 『佐藤内閣回想』中央公論社
- 毎日新聞政治部 (1987年) 『安保』角川書店

ニクソン訪中

- 松尾文夫 (1972年) 『ニクソンのアメリカ』 サイマル出版会, 1972年
古川万太郎 (1980年) 『日中戦後関係史』 原書房
松田康弘 (2006年) 「米中接近と台湾——情報統制と政治改革」 増田弘編 『ニクソン訪中と冷戦構造の変容——米中接近の衝撃と周辺諸国』 慶応義塾大学出版会
毛里和子, 増田弘 監訳 (2004年) 『周恩来・キッシンジャー機密会談録』 岩波書店
毛里和子, 毛里興三郎 訳 (2001年) 『ニクソン訪中機密会談録』 名古屋大学出版会
ユヌベル, ダニエル (井上勇訳) (1972年) 『キッシンジャーと私——ひとつの物語』 時事通信社
林代昭 (Lin Dai-zhao) (1997年) (渡邊英雄訳) 『戦後中日関係史』 柏書房
若泉敬 (1994年) 『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』 文藝春秋

[追記]

本稿の前半で、拙稿「ニクソンの『チャイナ・イニシアティヴ』」『一橋法学』第8巻第3号(2009年11月)と内容的に重複する部分があることをお断りします。

[謝辞]

丸山直起教授の長年の御芳情を深謝し、これからの一層のご活躍とご多幸を祈念致します。なお、明治学院大学法学部および法科大学院、とりわけ政治学科の旧同僚の先生方および法律科学研究所の方々から賜わった長年に亘った暖かいご配慮にもこの場を借りて満腔の謝意を表わします。